

推薦句

母の日や笑ひ話となる苦勞 友子
 第一波ようやく下火梅は実に 明美
 屋上へ伸びる管柱夏の風 明美
 風薫る島に孔雀の放ち飼ひ 才美
 梅雨の蝶そよぎて灯す大伽藍 才美
 自制心日々試さるる聖五月 友子
 カーテンをまだ閉めないでくれ遅日 秀夫
 (着眼点は良いが、なぜ春の季語で
 投句したのか?)

要推敲句

断捨離を済ませぬままに更衣 潤子
 添削案
 断捨離の済まぬ身のまま更衣
 十葉や絵どころ動く白き花 ヤエ子
 添削案
 十葉の花芯へ寄する絵のころろ
 コロナ禍に身辺整理夏の朝 眞壽
 添削案
 コロナ禍の渦中の整理夏ゆふべ
 雲雀野の真ん真ん中の忘我かな 才美
 添削案
 忘我して一人雲雀野ど真ん中
 柔らかき猫抱き寄せる更衣 和幸
 添削案
 柔らかきもの抱き寄する更衣
 女の子駆け行く団地いぬふぐり 直子

添削案

女の子駆くる団地よ犬ふぐり
 老ゆる今捨てる勇氣よ更衣 友子
 添削案
 老ひ故の捨つる勇氣よ更衣
 願い食む胴体太し鯉幟 眞壽
 添削案
 願はくば細き胴体鯉幟
 更衣見てるだけでももうお昼 和幸
 添削案
 更衣見てゐるのみやもうお昼
 鯉幟コロナ過ぎゆくまで蟄居 直子
 添削案
 コロナ禍のさるまで蟄居こいのぼり
 解凍の柏餅なり籠り居る 友子
 添削案
 籠り居や解凍中の柏餅
 猫の位置きのうと変わる五月かな 秀夫
 疑問点
 「猫」の必然性・詠嘆の「かな」とせず、
 明確に「夏に入る」とした方が良い。
 蚊遣香マッチ擦れたと幼なき手 潤子
 添削案
 蚊遣香マッチ擦れしと吾子五歳
 剥がれゆく総理の仮面七変化 明美
 添削案
 宰相の仮面剥がれし七変化

未央柳幼な子ふたりジヨギング

ヤエ子

添削案

未央柳幼なふたりのジヨギング

ダーウィン残せし言葉七変化 明美

添削案

ダーウィンの残せし論や七変化

亡き人の骨求む愛白牡丹 眞壽

添削案

忘れじの骨を愛して白牡丹

ホンチ戦少年の目へ夏木立 ヤエ子

添削案

避けられし本土決戦夏木立

「ホンチ戦」がわからない言葉であったが、「本土戦」と勝手に解釈

前髪と額の隙にある薄暑 秀夫

身体の一部を取り上げ、季語との連関性を指摘した俳句は色々とある。掲句はそれらに触発されたものであるが、暑さゆえ額に汗が滲んでいると言うだけでは、何か足りない。

更衣洗って乾かす古マスク

和幸

添削案

更衣隅に固まる古マスク

残したき雑草のあり草むしり

潤子

添削案

残したき雑草の叢草むしり

捨子猫鳴く闇もどり灯しけり

直子

添削案

捨猫の声に戻りし五月闇

園丁は若き美人や岩煙草 潤子

添削案

園丁の学僧凜と岩煙草

自転車組む駅前広場夏燕 才美

添削案

組立ての自転車広場夏燕

また増えたすてられん服更衣

和幸

添削案

捨つること罷りならぬと更衣

菖蒲湯に浸かって伸ばす皺としみ

眞壽

添削案

菖蒲湯に浸かりて伸ばす皺と笑み

紙飛行機を窓から飛ばす春夕焼

直子

添削案

窓からの紙飛行機や梅雨晴れ間

夏の朝鴉と対話あほな爺 ヤエ子

添削案

鴉との対話の時間夏休み

青信号まであと三日盛アマポーラ

添削案

秀夫

サンドイッチ胡蝶は蜜の味ならむ

柏餅青信号へ三日盛

直子

甘酒汲む自肅生活最終日

明美

添削案
胡蝶には蜜の味ならむハムサンド

添削案

甘酒や自肅生活最終日

床屋いき頭サッパリ更衣

夏草や塩飴含みつつ歩く

友子

添削案

和幸

添削案

草泉塩飴含みつつ歩く

髪結ひの髪のさっぱり更衣

割れ甕接ぐ夫の背中へ竹落葉 ヤエ子

添削案

甕接ぎの夫の背中へ竹落葉

あと少しコロナけちらせ更衣

和幸

添削案

コロナ禍は蹴散らせじきに更衣

外は雨居住まひ正し新茶淹る 潤子

添削案

新茶淹る雨に居住まひ正しけり

更衣腕の黒子の黒々し

秀夫

添削案

更衣腕の黒子はそのままだ

更衣心で着替へ身は変へず 眞壽

添削案

更衣こころ着替へて身は変へず

